

淨土三經往生文類と往還廻向文類

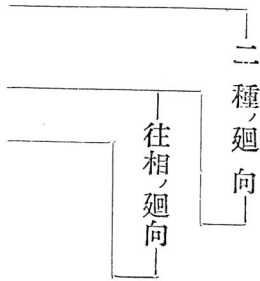
加藤 智 學

親鸞聖人の撰述には文類と名けられたる聖敎が四種ある。其の第一は『敎行信證文類』であつて、此の廣文類が元仁元年五十二歳の製作であるとするならば、それより三十年ほどを經過して後に『淨土文類聚鈔』といふ略文類が製作せられたので、此は建長四年八十歳の撰述とも云ひ傳られて居るが、傳存の一本には建長七年八十三歳の奥書がある。此の建長七年には亦『淨土三經往生文類』が製作せられ、その翌年の康元元年には『往還廻向文類』が撰述せられた。『往還廻向文類』は又『如來二種廻向文』とも題せられて正嘉元年八十五歳書寫の眞蹟本が傳られて居る。正嘉元年といふのは康元元年に改元されて正嘉となつたので、此の康元二年には『淨土三經往生文類』が再治されて更に一本の作製を見たのであつた。又此の『三經往生文類』には更に修治せられた形の一本があつて其の奥には文應元年八十八歳にして書かれたものと記されて居る。

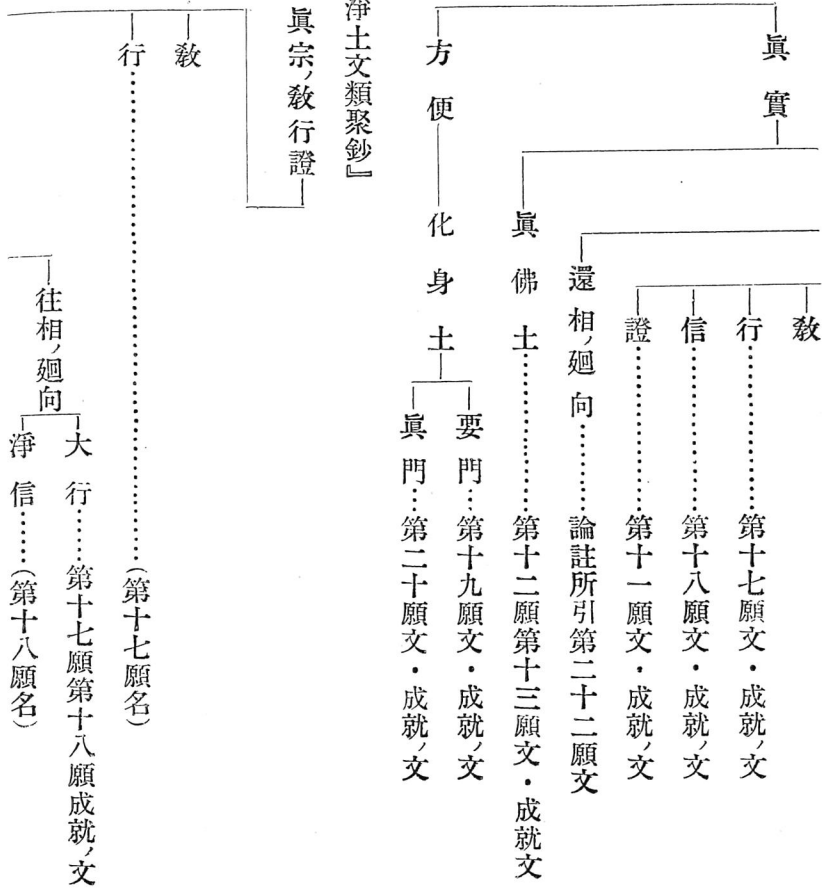
要するに聖人撰述の文類は『敎行信證』六卷『淨土文類聚鈔』一卷『淨土三經往生文類』一卷『往還廻向文類』一卷の四種であつて、『敎行信證』は廣文類、他は略文類である。古來『淨土文類聚鈔』を略

文類と呼んで来たのであるが、『教行信證』の廣文類に對して見れば、『三經往生文類』も『往還廻向文類』も皆略文類であると云ふてよからうと想ふ。『教行信證』は詳細に諸文を類聚して聖人の宗教を開顯したる大著作である。往還の二廻向も教行信證の四法も三願三經三機三往生の三三法門も皆此の一部六卷の中に詳説せられてある。實に是れ淨土眞宗の御本典であり廣文類である。此の廣文類の所説から方便の要門眞門を省略して眞實の教行信證と二廻向との文類を鈔出したのが『淨土文類聚鈔』であり、三經三往生の眞假三三の法門を宣顯すべく文類を略鈔したのが『淨土三經往生文類』であり往相還相の二廻向と眞實の行信證とを略説すべく文類を鈔出したのが『往還廻向文類』である。されば此等の廣略文類の説相を大觀せんが爲に今その所説の法門の大綱と所引の願文及び成就の文の具略如何を圖して相互の同異と關係とを示さうと思ふ。

(1)『教行信證文類』



(2)『淨土文類聚鈔』



本願力、廻向
證……………

第十一願成就、文

還相、廻向……………第十二願成就、文

(3)『淨土三經往生文類』

(A) 建長本

大經往生……………第十八願第十一願文・成就、文

觀經往生……………第十九願文・成就、文

彌陀經往生……………第二十願文・成就、文

(B) 康元本

大經往生

往相、廻向……………真實、行業……………第十七願文・第十七第十八成就、文

真實、信心……………第十八願文

真實、證果……………第十一願文・成就、文

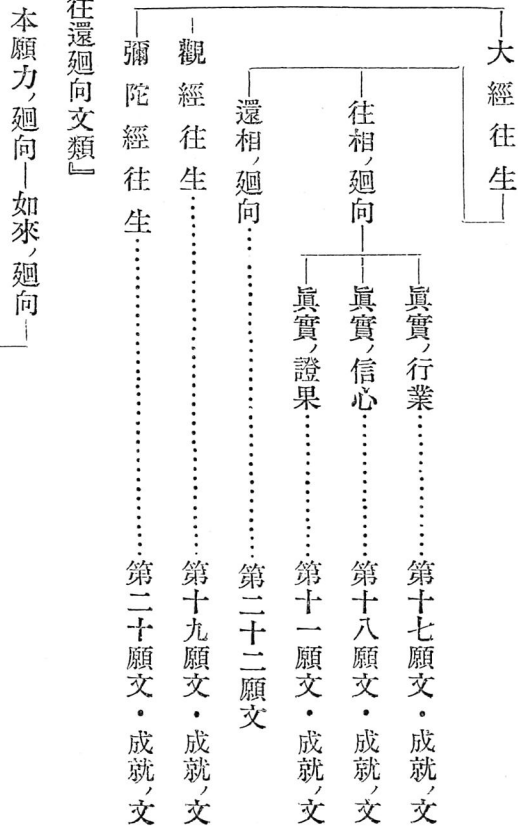
還相、廻向……………第十二願文

觀經往生……………第十九願文・成就、文

彌陀經往生……………第二十願文・成就、文

淨土三經往生文類之往還廻向文類

(C) 文應本



(4) 『往還廻向文類』

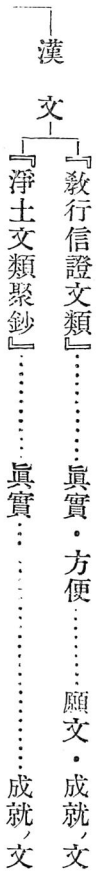
還相, 廻向..... 第十二願文

かく此等四種の文類の網格と其の所引の願文及び成就の文とを對照して觀察する時に、其の廣略と互顯の關係の頗る巧妙なるを感ぜざるを得ない。『教行信證』と『淨土文類聚鈔』とは漢文で書かれた聖典であり、『三經往生文類』と『往還廻向文類』とは和語で書かれた聖典であるが、此の兩者を對照する時に、彼と此の上に類同したる關係を發見せざるを得ない。『教行信證』には眞假の法門が悉く顯說せられて居る。實に廣文類である。『淨土文類聚鈔』は其の方便假門を省略して唯眞實の法門のみを抄說したものである。かくて復、略文類なるが故に、引用の經文は、總べて願文を略して成就の文のみを列ねてある。かうした様な廣略の關係を又再び和語の二種の文類の上にも觀察せざるを得ない。『三經往生文類』は三往生の義相を略說したる聖典ではあるけれども、其の網格から云ふと眞假の三門を全說したるものである。而して『往還廻向文類』は其の方便の二門を省略して唯その眞實の往還廻向と行信證とを略說したのである。かくて亦その引用の具略を觀察すれば、『三經往生文類』には願文及び成就の文を列ねてあるが、『往還廻向文類』には願文のみが引用せられて成就の文は總べて省略せられて居る。されば其の廣略の關係を圖說すれば即ち次の如くである。

四種、文類

法 門

引 文



和文	『三經往生文類』……………	眞實・方便……………	願文・成就文
	『往還廻向文類』……………	眞實……………	願文

顯說せられて居る法門と引用せられて居る經文との上から廣略の容態を觀察すれば、先づ斯様な關係を見出さざるを得ないが、製作の順序を考察するならば、漢文の二種文類の關係と和文の二種文類の關係とは大に其の趣を異にするものがあるやうに想はるゝ。『教行信證』の製作が元仁元年であつたか何うかと云ふことに就ては今日異論もあることであるが、兎も角も、關東時代に稿を成されたものと見て置いて、『淨土文類聚鈔』は其の後の撰述である。歸洛の後、八十歳頃の御老筆にて成されたものである。されば『教行信證』を原典として其の宗要を略抄せられたものに違ひない。ところが、『三經往生文類』と『往還廻向文類』とは、かうした關係ではない。『三經往生文類』が建長の略本から康元の廣本に成るまでの間に『往還廻向文類』が製作せられて彼の建長本に『往還廻向文類』の法相を加入して後の康元本の『三經往生文類』が修治せられたのであつた。此の間の製作修治の順序と關係とを云ふて見ると、大體かういふ事に成つて居たと想ふ。『淨土文類聚鈔』撰述の後に略本の『三經往生文類』が製作せられた。勿論その時は略本といふ譯の者では無かつたのである。東本願寺に傳存せる古本の『淨土文類聚鈔』には建長七歳七月十四日八十三歳にして書かれたといふ奥書があるから、『淨土文類聚鈔』より後に『三經往生文類』が作成せられたことは確實である。それと

いふのは、西本願寺に傳存せる略本の『三經往生文類』には建長七歲八月六日八十三歳にて書く。與書せられてあるから、此の建長の略本『三經往生文類』は『淨土文類聚鈔』より後の撰述と見なければならぬわけである。そこで、かうした順序から考へて見ると、眞實の二廻向四法を略抄した略文類の製作はあつたが、眞假三經三往生の法門の要旨を宣説した簡易な聖教が出来てないこと故に、而も此の眞假三往生の法門たるや聖人の體驗に基づく大切なる法義なれば、此の法門の略鈔は必ず試みられなくてはならない事であつたので、今度は私釋を和文にして此の眞假三經三往生の要旨だけを簡易に叙述せられたもので、それが、先づ成された建長本の『三經往生文類』であつたのである。されば建長本は三經往生の要旨だけを叙べたもので、其の大經往生の下に二廻向四法を説くが如きことは無く、簡短に三往生の旨趣だけを告げられて居る。即ち其の要旨は次の如くである。

大經往生……………	他力念佛……………	眞實報土……………	難思議往生
觀經往生……………	自力諸善……………	方便化土……………	雙樹林下往生
彌陀經往生……………	自力稱名……………	疑城胎宮……………	難思往生

これで眞實方便の三往生の要旨を叙説した略文類が出来たわけである。先には眞宗の教行證を叙述して其の行の下で往還二廻向の義をも宣説したる略文類が作成せられ、その次に今は眞假三往生の旨趣を顯示したる略文類が撰せられたのである。かうして一通り廣文類の要旨を鈔説した略文類が

出來た。ところが、彼の『淨土文類聚鈔』の顯し方では、敎行證を本位とした説明であつて、往還二廻向を直顯したのではない。そこで今度は往還二廻向の義趣を簡易に説明すべく今一つ略文類を製作せなければならぬといふことに成つて來た。かうした譯で『三經往生文類』製作の翌年『往還廻向文類』を撰述せられたのである。この建長八年は康元元年と改元せられたので、三河佐々木の上宮寺に傳存せる『往還廻向文類』には康元元年十一月二十九日八十四歳にして之を書くといふ奥書がある。此の『往還廻向文類』は、往相還相の二種の廻向を叙述して、其の往相廻向に就て眞實の行業と眞實の信心と眞實の證果とを説き列ねて、頗る簡短に願文だけを引いて二廻向の義趣と行信因果の要旨を顯示せられて居る。かくして三種の略文類が出來た。先づ眞宗の敎行證を敬信すること告白し勸説したる『淨土文類聚鈔』が撰せられ、次に眞實方便の三經三往生の要旨を宣顯したる『三經往生文類』が作製せられ、更に又往相還相の二種廻向の義趣を叙述したる『往還廻向文類』が著作せられたのである。これで一先づ廣文類の後に宗教の各方面の要旨を叙述したる略文類が出來たのであつた。康元二年は聖人八十五歳である。此年また改元せられて正嘉元年となつた。眞假三往生を宣顯したる『三經往生文類』は此の年再治せられ、其の大經往生の下へ彼の『往還廻向文類』の所説を挿入し、二廻向と眞實の行信證とを叙述し、彼の建長本に對比して廣本と謂ふべき『三經往生文類』が修成せられた。そこで此の康元本の『三經往生文類』には、眞假の三往生も、往還の二廻向

も、眞實の行信證も、其の要旨は悉く説き攝められたわけで、略文類としては最も多くの義趣を顯示し得た者が出來たわけである。且又その引文の具略から云ふても『淨土文類聚鈔』には願成就の文を引用して願文を出さず、『往還廻向文類』には願文のみを列ねて成就の文を引かず、かやうに略鈔されて居るのであるが、『三經往生文類』は願文をも成就の文をも引き列ねて義趣を顯示して居るのであるから、此等の點から云ふても、此の聖教が略文類の中の最も内容の多い者である。聖人は最後にかばかりに義趣の具備した略文類を製作せられたのであつた。興正寺には此の廣本の古寫が傳存せられて居る。其の奥書には康元二年三月二日聖人八十五歳にして書寫せられたといふことが記されてある。改元は此の三月に行はれた。そして此の年には閏の三月があつた。『往還廻向文類』は又『如來二種廻向文』と題せられて復此の年書寫せられた。高田の專修寺に其の眞蹟が傳へられて居る。それには正嘉元年閏三月二十一日に書寫したといふ奥書がある。八十五歳頃の老聖人は此等の聖教を製作したり修治したり書寫したりして淨土眞宗の要旨を宣顯すべく努力して居られたのであつた。『三經往生文類』には此の外に猶ほ一本が傳へられて居る。それは文應元年十一月三日八十八歳にして書かれたといふ奥書のある者で佛光寺の『眞宗和語寶典』に編入せられてあるものである。これは大體は彼の康元本と同様の者であるが、大經往生の下の引文の處が少しく改められてある。かばかりに再治三治して世に遺さんとせられたものとして想へば、『三經往生文類』は頗る聖人の意

趣を籠められた大切なる聖教であることを思合せざるを得ない。今如上述べ列ねし如き修治の歷程を大觀すべく諸本の綱目及び引用を對照して聖人撰述の事蹟を偲ばうと思ふ。

建長本『三經往生文類』 『往還廻向文類』 康元本『三經往生文類』 文應本『三經往生文類』

○大經往生

淨土論、文

○大經往生

○大經往生

□往相廻向

□往相廻向

□往相廻向

△眞實、行業

△眞實、行業

△眞實、行業

第十七願文

第十七願文

第十七願文

△眞實、信心

△眞實、信心

△眞實、信心

第十八願文

第十八願文

第十八願文

如來會第十八願文

如來會第十八願文

如來會第十八願文

第十八願成就、文

如來會第十八願文

如來會十八成就、文

第十一願文

如來會第十一願文

△真實、證果

第十一願文

如來會第十一願文

第十八願成就、文

如來會十八成就、文

如來會十一成就、文

淨土論註、三文

△真實、證果

第十一願文

如來會第十二願文

如來會十八成就、文

第十一願成就、文

如來會十一成就、文

淨土論註、三文

△真實、證果

第十一願文

如來會第十一願文

第十一願成就、文

如來會十一成就、文

淨土論註、三文

□還相廻向

淨土論、文

第二十二願文

□還相廻向

淨土論、文

第二十二願文

□還相廻向

淨土論、文

第二十二願文

○觀經往生

第十九願文

悲華經，願文

第十九願成就 三輩段，文

第二十八願文

第二十八願成就，文

往生要集，文

○彌陀經往生

第二十願文

第二十願成就 智慧段，文

如來會第二十願文

淨土論，文

○觀經往生

第十九願文

悲華經，願文

第十九願成就 三輩段，文

第二十八願文

第二十八願成就，文

往生要集，文

○彌陀經往生

第二十願文

如來會第二十願文

第二十願成就 智慧段，文

淨土論，文

○觀經往生

第十九願文

悲華經，願文

第十九願成就 三輩段，文

第二十八願文

第二十八願成就，文

往生要集，文

○彌陀經往生

第二十願文

如來會第二十願文

第二十願成就 智慧段，文

如來會智慧段、文

觀經定善義、文

大經述文贊、文

如來會智慧段、文

觀經定善義、文

大經述文贊、文

如來會智慧段、文

觀經定善義、文

大經述文贊、文

かうして見ると、『三經往生文類』と『往還廻向文類』とは、初は別々の法門の要旨を宣顯せんが爲に製作せられたものであつたが、康元二年八十五歳の時に兩者の所説を合糅し修治して廣本の『三經往生文類』を作成せられたのであつた。かく修治作成せられた康元本の『三經往生文類』に對照して『往還廻向文類』を見た場合には、眞假法門の具略や引用經文の具略などの點に於て、『教行信證』に對する『淨土文類聚鈔』の廣略の關係と頗る類同したる關係を此の和語の二種の文類の上に認めざるを得ないのである。然し上に述べたるが如く作製の順序は漢文の二種の文類の關係とは反對の理由に依つて斯くの如き三種の和語の文類が修成せられて居るのである。かうした研究によりて聖人御老後の述作の上に流動した御意趣の一端を想察することができたわけである。